

# 二つの磐船神社

## 理事

2005年秋、地元の人から太子町と河南町の境の所(大阪南河内)に巨石がゴロゴロある山があると聞いた。その名を「磐船神社」と言う。小生、太子町に移ってきて30有余年、このように近いところにイワクラの山があるということを知らずにいた。しかも、イワクラ研究をするものにとつてよく知られている「交野の磐船神社」と同じ名前の神社であり、しかもその由緒もまったく同じと聞いたのである。これでは行くなどと言われでも行きたくなるのが人情と言うものである。

### 一 河南町の「磐船神社」

自宅から二上山のほうに向って1km、ふもとの分かれ道で右折してさらに2km、河南町の平石という

集落に着いた。そこはもう磐船神社の麓である。そこから少し山道を行き、高貴寺の駐車場に車をとめた。

そこから、幅2mほどの山道をたどること7〜800m、磐船神社の社が見えてきた。境内は広くはないが、静謐で落ち着いた佇まいである。鳥居をくぐると正面に拝殿があり、ご神体である背後の神奈備山を拝む形となっている。

由緒書きに『旧事記天孫本記によると「饒速日命十種の御宝を奉じ天の磐船に乗りて河内国河上の哮峰に天降り給う」とある。本社の創祀はこれに由来すると思われるが、その年代は明らかではない。境内には豊富な伝説をもつ天磐船、浪石、灯明石などの奇岩怪石が多く、社後方にそびえる峰は古来「哮峰」と呼ばれるものである。この神社は長い間祭祀の原形ともいえるべき「神奈備」の様式をとっていたようで、山全体がご神体とされている。江戸時代の末ごろ高貴寺の大徳慈雲尊者が葛城雲伝神道を創唱するに当たり、本社をその根本道場にあて「樛宮」と命名

した。今日これが通称となっている。



明治初年、神仏分離によって本社は高貴寺より分れ磐船大神社と称するに至った。本社は社域の広大なること、眺望の絶景をもって知られ、晴れた日には、河内平野のかなた大阪堺、岸和田、北摂の連山を一望のもとにあつめることができる。』とあった。拝殿の背後には船底を上に向けた形をした磐をご神体とする拝殿がある。形としては、神奈備山があり、

その中腹にこの神社の名の起りである舟形の磐があり、それらを拝むように拝殿が二つ直線状に配置されている。



船型のご神体岩

拝殿の左手に巨石が二つ斜面に直列に並んでいるのが見えた。下のほうの磐は高さ3 m奥行き7 mぐらいの巨石で、横から見ると舳先の突き出た船の形をしている。その下部からは清水が湧き出ている。この巨石の背後に幅4 m、奥行き7 m、高さ2 m程度のやや扁平な巨石があり、板垣で囲われている。これも、まさし

く船の形をしており、磐船神社と呼ばれるにふさわしい。なお、よく見ると二つの巨石の前に60 cmぐらいの小さな三角状の岩があり、鎖で囲われ保護されていた。どうやら、この三つの磐が直列状に並んで一つのご神体を形成しているようである。



直線状に並んだ船型岩

この巨石の横を登る事約50 mの所に別の巨石をご神体とし、それを拝むための拝殿があった。その昔は、この巨石を直接拝む形であったであろうことは、周りの石の配列で想像



ご神体と拝殿

できた。拝殿の横をすり抜け裏手に回ると、ご神体である巨石のすぐ横に近づくことができる。このご神体のすぐ近く5 mぐらいの所に余り大きくはないが特徴的な岩が存在していた。それは、一つの面が鏡のように平らで、同じ形状をした岩が三つ直線状に並んでいた。これは、自然の岩の露出とは到底思えない人工的な趣を持っている。

何故、このような三つの岩が並んでいるのかと考えたとき、航海の神

住吉神社の社殿が三つ並んでいるという事と関係があるのではないかと思った。後に分かったことであるが、平安時代に航海の神住吉信仰が広まったとき、船と関係が深いということから磐船神社と住吉神社が結びついたといわれている。ちなみに、住吉大社の社殿はオリオン座のベルトの三つの星を表しているといわれている。このことから、磐船神社の三つの巨石はオリオン座のベルトの星を現しており、住吉大社の社殿の原



オリオン座の三ツ星？



陰陽石(下部に人工的な割れ目)

形ではないかと想像できる。

さらに奥に足を踏み入れると見事な陰陽石が現れた。上部はそそり立つ男根状の岩で、その下部は女陰を人工的に彫り込んだようにみえる。そして、これ等は巨大な土台岩の上に鎮座している。この岩より西方を眺めると河内平野が一望できることから、この岩は平野から見たとき巨大な道標となっていたのではないかと思われる。

さらに、その奥に足を伸ばそうと

したが、その先はかなり急な崖になっており、一人で踏み込むのは危険と判断し、引き返した。

帰り道、道から見える山腹に巨大な岩が見えこの山中にはまだ未知の巨石が相当数残っていると確信を持った。後日の探訪に期待しつつ帰路についた。

## 二 交野の磐船神社

交野の磐船神社は、磐座に興味あ

る人は勿論、そうでない人にも人気のある観光スポットである。メインは高さ十数メートルある船型の巨石であるが、その下部に広がる巨石の隙間を潜り抜ける胎内くぐりのスリルと神秘さでも人気がある。

河南町の磐船神社探索後、同じ名を持つ交野の磐船神社を探索することで、何か共通点が発見できないかと言う期待を持ったわけである。我が家からは車で約1時間半、生駒

山の東山麓を通る国道168号に沿ってひたすら北上をする。奈良と大阪の県境にその磐船神社はあった。駐車場に車を止め、歩く事数分で磐



交野磐船神社

船神社の境内に着いた。小さな境内に意外な感じがした。境内には不動明王を刻んだ巨石と道を挟んだ向かい側に天孫降臨岩と称する巨石あり。

境内には、磐船神社の名の起こりとなる巨大な船型の岩が他を圧倒するような形でそびえている。高さ12m奥行き12mの巨大な岩である。

この下部に胎内くぐりがあり、300円也を払って白衣を借りた。入り口からすぐに5m位の急梯子があり、これに怖気付いて引き返す女性も多い。梯子を降りるとやや広い空間があり、天の川の清流が岩の下の方を流れている。そこには丸太を2本括っただけの橋が架かっており、かなりの恐怖を感じる。そこを過ぎると非常に狭い岩の隙間を抜けるようになっており、途中で引っかかりながら、意を決し通り抜けた。幸い引っかかりなかった。それを抜けると大きな空間があり、外部から差し込む光で一種荘厳な雰囲気になった。胎内くぐりの出口を出て急な階段を登ると「天岩戸」である。巨大な岩に圧倒される。

境内にはその他多くの巨石が存在するが、そのすべてを紹介することは出来ないのが残念である。またの

機会に譲りたいと思う。



### 三二二つの磐船神社の考察

二つの磐船神社はまったく同じ伝承を持っている。河南町の磐船神社では、「饒速日尊が天照大神から天羽羽矢（あまのはのはや）と歩鞞（かちゆぎ）と言う宝をいただいた、た

くさんの神々を従え、磐船（いわのくすふね）という大きな船に乗って下界へ降りてこられた。大浪が吼え猛る葛城の峰の嶺に船を捨てると、尊は大和国鳥見白庭山へ城を築き、この所を根拠としてその辺の国々を平定されました。」（富田林青年会議所発行『郷土の伝説と民話』より）

交野の磐船神社では、「伝えて曰く、饒速日命の天津御祖の詔を稟け、十種の神宝を奉じて哮ヶ峰に降り給ひしとき乗じ給いしものなり・・・」と伝えられている。何れもが饒速日命が大きな船に乗って多くの神々と共に降られ、その船をとどめた所が磐船神社として祀られており、どちらも船の形をした巨石が特徴であることが共通している。

神話や伝承は古代の真実を伝えている場合が多いと聞く。この伝承の固有名詞を除き、そのエッセンスだけを見ると、古代大きな船に多くの物資を載せた大勢の人たちが川を遡り、葛城または生駒山の麓の「船着場」に到達し、そこで船をとどめ徒歩で葛城または生駒山を越えて大和の

地に入ってしまった姿が想像できないではないか。古代の交易の姿が目に見えるようである。即ち、二つの磐船神社のあるところは古代の船着場のような場所であり、遠く海路をたどってきた人たちに場所を知らしめるための案内標識として巨大な磐が用いられたのではないだろうか。しかもそれが船の形をしている事で他の標識との区別がついたのかもしれない。後の時代になって、本来の役割が消えたとき、巨大な船型の磐のみが残り、伝承と共に「磐船神社」として現在まで伝わってきたのであろう。

では、何故この二つの場所が古代の「船着場」として選ばれたのであるうか。

大阪の地図を見ると交野の磐船神社と河南の磐船神社は直線距離にして約30km離れて存在している。しかも河内と大和を隔てる生駒山系と葛城山系の西側山麓に位置しており、その東側にはそれぞれ「割り石峠」、「平石峠」といった大和に通じる峠があり、古代の交通路を形成していた

ようである。さらに云えば、古代河内平野は大阪湾の内海となっていたことがわかっている。紀元前2〜3千年頃の河内平野を示したのが図・1である。これを見ればわかるように瀬戸内海を通り大阪湾に入ってきた船が更に東に進んで内海に入ってきたとき、生駒・葛城山系の山の麓の巨大な磐がその行き先を示してにくれていただろう。更に30km南に下れば河南の磐船神社の位置にそびえる巨石が大和への入り口を示してくれていたであろう。古代の人たちは、そこで船を捨て徒歩で峠を越えて大和へと交易のために入っていたと思われる。

ところで、大和と河内を隔てる生駒・葛城山系を横切る峠道は現代では北から交野の割り石峠(現国道168号)、清滝峠(現国道163号)、暗峠(現国道308号)、亀の瀬(現国道25号)、穴虫峠(現国道165号)、竹之内峠(現国道166号)、平石峠、水越峠(現国道309号)の八箇所存在している。これ等の峠

の手前に巨石を配置してその位置を示しているものは、交野の割り石峠と河南の平石峠のみである。(他の峠についても調査すれば巨石が発見されるかもしれないが、現時点ではこの二箇所のみである)

何故この二箇所が巨石で案内されているのかと考えたとき、紀元前2〜3千年の頃大和平野も湖であったという説が頭によぎった。(図・1参照)

であれば、古代大和に入った交易者たちは、大和湖の湖岸に住む豪族たちとの交易もさりながら、更に東に進んで大和高原の豪族たちとの交易を行ったのでは

ないだろうか。とすれば、図を見ただければわかるように交野の磐船神社および河南の磐船神社を入り口とする峠道を使えば、それぞれ大

和湖の北岸及び南岸に達する事になり、東の大和高原地帯に入っていくのに非常に都合のよい場所にあるということがわかる。このことから、



大阪古地図 (BC2000年～3000年) (想定図)

二つの磐船神社のある場所は古代（縄文時代）の交易の拠点としての役割を担っていたのであり、それを指し示すための船型の巨石であった。古代の交易者たちは、船型の巨石を目印に船を操り、大和への入り口に到達し、荷を陸揚げし、そして、ここからの旅の安全をこの巨石に祈ったかもしれない。

ここまで考えてきて、はたと疑問が生じてきた。なるほど、大和の地は大和朝廷により日本の文化・行政の中心として発展したが、縄文時代においては如何であったのか、不明にしてよくわからない。多くの豪族が跋扈していた事は想像がつくが、この時代に海を渡って大和の地に赴く人が果たしてどれほど存在していただろうか……。縄文時代後期の大和の状況をもっと明らかにする必要がありそうである。そうすれば、古代の道の存在や、道標としての巨石の存在の意味が見えてくるのではないだろうか。

以上、十分な資料が無いまま私の大胆な仮説と思ひ込みによる論の展開である。

今後、全国の磐船神社を調べ、共通した内容があれば、「巨石」が何故そこにあるのか、その役割は何なのかが少しずつ明らかになってくるものと思う。

了

### (追記)

全国に「磐船」と名のつく神社は幾つか存在している事がわかつている。それらすべてが、この交野と河南の磐船神社のような交易のための拠点ないしは入り口のような役割を果たしていたかどうかを更に調べてみたいと思う。

たまたまインターネットを眺めていて、滋賀県の能登川町にある猪子

山(268m)に「磐船神社」があることがわかった。ここも船型の巨石がご神体である事が共通している。また猪子山自体がイワクラの宝庫である事も共通している。更には、その位置を見ると古代水運の大動脈である琵琶湖から伊賀高原、更には大和高原にいたる陸路の入り口に位置しているようにも思える。

まさしく、交野と河南の磐船神社と同様海路から陸路への乗り換え拠点のような役割を持っていたのではないだろうか。

丹生と巨石の情報ともどもお近くの磐船神社の情報を事務局までお寄せ下さい。